

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十六年十二月廿五日印刷
昭和二十七年一月一日發行

第十八卷 第一號

浄土

新年號

靜かに散つてゆくもの

吉田絃二郎

眞の自由と平等を

金森徳次郎

新年の希望

椎尾辨匡

日記抄

眞野正順

1952

1

一九五二年元旦

謹賀新年

法然上人鑽仰會

目次

新年の希望……………	椎尾辨匡(8)
年末年始の宗教習俗……………	中村康隆(11)
新しきみち……………	藤井實應(22)
中國の正月……………	安居香山(20)
散りゆくもの……………	吉田絃二郎(1)
眞の自由と平等を……………	金森徳次郎(4)
「浄土」有縁の人々……………	藤井實應(14)
徳本行者……………	服部英淳(25)
永遠のいのち(三)……………	佐藤良智(17)
日記抄……………	眞野正順(28)
芝園だより	



静かに散つてゆくもの

吉田 絃二郎

からだに故障があると、つい、神佛にお願いをかけたがるのが人情である。わたくしも、自分のからだの不由さから、ともすれば神佛に無理な願ひをかける氣持ちになることがある。

しかしそんな時わたくしは宮本武蔵の「神佛を敬して神佛に願はず」といふ言葉を思ひ出し、自分の利己的な願ひを恥ぢる氣持にもなる。しかし所詮人間は弱いものである。病んでは神佛を思ふ。

かうなつて來ると病ひも一つの神佛の恩寵である。めぐまれた機縁であるとも考へられる。病むことによつて神を想ひ、佛を懷ふ。

綱島梁川が「われ神を見たり」といつたのも病中であつた。病ふ人のみが神佛と首つ引きの、絶對絶命の、全我的な心境に生きることができろ。

財を積む者は貪慾になり易い。卑しむべきであるが、人は長命を欲する心をさげすみはしない。しかし長命を願ふ心にも貪慾のかげが伴ふことがある。死ぬるも生きるもあなたまかせでありたい。病の癒ゆるのもあなたまかせでありたい。どうせ一度は還りゆくべきところに還りゆくのである。

冬枯れの庭を見てゐると、音もなしに木の葉が落ちてゆく。一枚一枚の木は葉は何の未練もなく散つてゆき、

靜かに土の上に安住する。やがて掃き取られ、一つにかき集められて、白い灰となる。しかもかれ等は一切をあなたまかせである。

落葉の落ちてゆく姿はわたくしたちに、「死に支度いたせいたせ」と教へてゐるが、さらに生死の關頭にありて一切をあなたまかせに徹してゐるものゝ尊さを暗示してゐる。

このごろの武藏野を歩いてゐると、廣い耕作地は黒い地肌一色につままれ、落葉し盡した雜木林のかなたに秩父や丹澤や箱根の山々が、山巒までもあらはに見えてゐる。いかにも澄み切つた空氣の感じが深い。しかし全體として荒涼たる景觀であり、黒い山骨と蕭條たる寒林枯木の素畫である。この寂び果てた墨繪の中にたゞ一つ燃えるやうな、唐錦の色彩を見せて、武藏野を逍遙する者の心をなぐさめてくれるものがある。ぬるでの紅葉である。

ぬるでは雜木の中の雜木で、直ぐ、そこいらに芽を出し、繁茂しやすい木である。かへり見る人とてもない木であり、冬近く紅葉しても敢てこれを眺める人もないくらゐで、大根を洗ふ小川のほとりに、雜木林の縁などに伐り残され、農夫たちはぬるでに牛馬をつないでゐる。ぬるで自身も、かれ自身を平々凡々の雜木と思つてゐるやうに思える。しかし、じつとながめてゐると蜀江の錦を織りなしたぬるでの色彩美は、冬枯れの武藏野のがめに、本質的な美を加えてゐる。

この平々凡々な雜木は冬が訪れて、その落葉の時節が近づいて來て、はじめて萬木に秀でたるかれ自身の美しさをを見せて散つてゆく。しかも誰れも氣にとめる人もなく、落ちては牛馬の足に踏みにじられたまゝに、靜かに大地に還りゆく。

人間の場合にもぬるでに似た運命に生き、死んでゆく人がある。否、たいていはぬるでの宿命に生き、死んで

ゆくのである。そのやうな人の生活は寂しいが忘れがたいものがある。

四十年前も前のことである。わたくしは駒込の或る棟梁の二階に間借りをしてゐたことがあつた。二階には南向きの部屋と北向きの部屋と二室あるきりで、わたくしは南の部屋を借り、北の部屋には、すでに六十歳を越した老人が一人で住まつてゐた。老人は芝居の衣裳の刺繡の下請け職人で、芝居の開場が近づいて來ると、冬など寒い北側の部屋で夜を徹して刺繡針をはこんでゐた。

わたくしは時々かれの部屋を訪れて孤獨の老刺繡師と語つた。暗い寒々としたかれの部屋に絢爛たる歌舞伎衣裳を見出す時、かれの部屋の空氣は妙に悲しいものを感じさせた。

薄暗い室の片隅には薄い夜具と、火の氣の乏しい火鉢とたゞ一個の柳行李が見られた。わたくしはその狭い食しい一室で一針一針丹念に、華やかな舞臺衣裳の針をは

こんでゆく天涯孤獨の老職人を見てゐる間に、ふと、その華かな衣裳を纏ふて脚光の前に觀客の拍手の嵐を浴びてゐる俳優の姿を想ひ出してゐた。

不運なる老職人はわたくしの悲しさ空想に氣付く筈はなく、黙々として針をはこんでゆくのであつた。かれはちよつと針の手を休めて

「わたくしは、かうして夜晝はたらき通す、おかげで、かならず一ヶ月に一度は錢を拂つて芝居を觀ることができなのです」と、いかにも楽しさうに言つた。

かれにとつて、生きることのよろこびは一ヶ月に一度追ひ込みの席に坐つて芝居を觀ることであつた。

かれの部屋には九代目の辨慶や成駒屋の千早姫の寫眞などが張られてあつた。

遠い昔を振りかへる時、ふと老刺繡師のおもかげが浮んで來る。もはやかれも靜かに死んで行つたことである。

眞の自由と平等を

金 森 徳 次 郎

私は皆様に特に申上げるほどのことは何もありません、しかし、

私一人の人生観、或意味では獨斷とでも云うべきものを持つております。宗教を持たない普通の生活をする者にとつては人生の根本的な事は分らず、只、日常生活を整えるために分つた顔をしているにすぎず、我ながら情無いと思う。だが、私は、人生の現實規正のための判斷をどこに置いたらよいかについてはたえず關心を抱いています。私を中心として考えました人間の悩みというべきものとも云えましょう。この關心への努力は、將來も限りなく續けて理想へ到達せんと念願するものであります。

さてそこで、世の中の事は獨斷を以て整理をすることができるといいますと、なか／＼そうはいかない。故に、なるべく間違事を避けるために歴史に於いて此れを見たい。

理想から云いますと、丁度明治四十年頃、土居晩翠が「天地有情」という詩の中で「人と人との間に恨みがなく、國と國との間に恨みがなく、人生にさかさまごとがない」ことを歌っているように、我々は詩人の如く恨みも憤りもなく生きたい理想に燃えております。

だが、茲に私共の考うべき問題が横わつておる。現實にはそういかぬ、故に、私は人生のより所をどこにおくかを考え、又、その置き所を幾千年に發達させ理想に到達させるために、俗的な考えとして人類の歴史に之を把みたいのであります。それは四つの變化に分けて考えられます。

● 第一の時期は、宗教的な考えで、神を人間生活の根源とするものです。例えばローマ法は神より與えられたものとされている。神が民族の上に支配し、日常生活の秩序であつた。物の賣買、政治、結婚に到るまで神の規定に従う。しかし民族毎に宗教が異なるから、各々別異のものしかもてず、相互による原理がない。そこで普遍的、社會的な法則、より所へも關心が強められていつたのである。

かくて第二の時期は、宗教よりもつと俗つぽい力による支配の時期であつた。即ち、武力とか金力で人生を律するのである。有名なローマのネロの暴政は、嘘か眞か知りませんが、戦争の捕虜に動物の皮を縫いぐるみにして廣い所に放して獅子や虎に追いかけて酒の肴にしたり、人體を荒縄でぐる／＼まきにして油をかけて頭か

ら火をつけ人間ろうそくとして、リクリエイション(?)に供したという。或時、奴隷を獅子に喰わせようとする獅子は奴隷の耳もとに口をよせて、まちがつても來世は人に生れず四つ足に生れてこいといったという話すらある程、力が世の中一切を支配したのであります。之はローマに限らず、中國でも、日本でもそうである。山椒大夫の話等幾多之を窺い知ることができる。しかしこのような状態では、人間はいつか反撥を致します。

それが歴史的に顯れたのが、次の第三期、十六・七世紀であります。我々は何故、力によつて、權力によつて壓せられるのか、かゝる理由はない、といういわば人間一人一人の増長した考えである。人間のみを偉いとした中世紀の人間の自覺、即ちエマンシペイション(解放)時代である。ヨーロッパ、アメリカの各所に見られた。この五尺見當の一人一人の人間に重點をおき、我々は生れながら自由であつて壓迫を加えられぬといういわば素朴個人主義であつて、ジャンジャツクルソーでも個人にのみ主眼を置いている。しかし、人間生活に大きな影響を與えた時期であります。

宗教・藝術では各々傳統を破り個性を伸した宗教改革、ルネッサンス等があつたが、今は政治及び生活について考えて見よう。

此期に二つの火の手が上り、一はアメリカ、一はフランス其他、歐洲各所である。アメリカは、惡くいえば英本國を食いつめて、よくいえば、英本國にあきたらずして、人の理想實現を求めた新天地であります。アメリカ文化發生の地はニューイングランド、ボストン中心に發達した。ここに行くと、今は七階、八階の大建物のある

立派な街であるが、所々、古い三・四百年も前の教會があつて周圍に小さな墓地があり、墓も素朴なつくりのものも見かけられるのである。

此れは一四〇〇年のはじめ頃、夢をのせて上陸したヨーロッパ人は宗教を重んじていたからです。今ではビルグリムファーズは土地の自慢です。一四二〇年頃宗教的迫害に會いビルグリム(巡禮)の徒百人程がメイフラワー號に乗船してアメリカに向い、いよいよ明日ボストンに着く時、理想實現のための連判狀を作りました。其れがメイフラワー號に於ける契約といわれる有名なものです。原本は長く英本國にあつたが、今ボストンにあり貴重なものとなつております。實際は書いただけで行われず、別の基礎で社會は初つたが、いずれにしても、中心に教會、周圍に家があり、日曜には教會で祈りを捧げ、又、相談ことも此を中心に集會して行われた。此の形式が全てであつたとは申されないが、移住者には多かつたのです。先に述べたように教會を中心として家があるのは其の名残りである。此の意味する所は、一人としてある人間、對人間の相談すべてが行われた事實を語つておるという事であります。

話がそれるが、日本で修學旅行等に行つても、古戰場、城等、暴力の遺跡は多いが、人間の力が盛り上る。又、民主的精神の遺跡が少く、我々にひしひしとせまる人間性自覺の残された教が少いのは残念である。ニューイングランド各所を巡ると人間個性の臭いがします。

さて、この建設者に英本國は壓迫をはじめた。アメリカに海外貿

易を禁じた。何となれば貿易はとても儲かる仕事で、之のお株をとられては困るからです。又、とても重税を課し、植民地の人々は、もう我慢ができなくなつた。或時はインドの茶を政府が高値で買わせようとしたので、ボストン、マサチューセツツの人々は憤慨し船四隻分の茶をボストン灣の中へはおりこんだものである。かくして遂に戦争となり一七七六年獨立した。この際の文書が有名な獨立の宣言で、有名な、我々は自由、平等の權利を持つという文句を含むものです。何故にそれを持つかという事については、人は生れながら自由幸福を追求する權利ありとし、特に論證はなく、自明の理、セルフエビデントという事で落ついていたに過ぎなかつた。個人的主張の根據も其以上のものは無かつたのである。

第二の火の手は一七八九年のフランス大革命である。人權宣言を議會に於て決した、其はアメリカのそれと同じく、人の自由、平等を叫んだものに外ならなかつた。

この第三期を冷靜に觀察すると一つの反抗意識を持つております。アメリカのは英本國に對し、フランスのは皇帝に對するものである。小さな子が父に向つて反抗する氣持に似ていくらか無理な所がある。しかし、だん／＼歐米では成程自由平等は美しいが、人は獨立して存在せず、同類と共同生活をしており、其が實情であることに反省しはじめた。ルソー自身、社會契約論の初に、人は自由に生れたり、しかし、鎖に繋がれたりといつておる、つまり社會の中の個人であることに氣付いている。十八世紀には、獨立、人權の宣言のために魅せられ、社會を主張する面が少かつたが、實情は次々と

其に墨を塗つて、社會に於ける個人の考を強めて參つたのです。たゞ自由平等の考から社會を出すのは無理でありまして、眞に生きた人、及び實情は社會というものを考えずにはおれないのです。

そこで第四の時期、現代に入ります。即ち個人・同類・社會の三つの原理を持たねば安心できないのが實際であります。もはや前期とは考が進み異つておるのであるから、その今日、個人の自由、平等のみを言うのは時代錯誤も甚しく感心致しません。

所が日本では、第三の自由平等の時代を経ずに第四期に入つた、即ち明治二〇年以後の時代であります、第四期というか、むしろ人間集團のみを考うる時代でありまして、明治、大正、昭和にかけて戦争を惹起した所謂全體主義的な考でした。子供になぜ學校へ行くかという、國家のためと答える、なぜ百姓するかという、國家のためといった状態、人に重きをおかず國家至上の考でした。しかし、一切は人間の心から發したものであります、人をみ／＼ずをひねるように取扱わるべきではない。一人一人の個人を尊重し、しかも同じ家内、村、職場、國、乃至地球全ての共通の利害の上に立つて、之を考えていくべきであります。

あの金平糖の角は三十六本づゝあります。もし一日小刀で細工しても、あれができるかどうか疑問でありますが、たゞなんとなく澤山の數があつても一つ一つの個性の上に、共通性を持つてゐる點が面白いと思います。人もそうであつて、個人、集團のみ考えず全體の共通の幸福を發達させねばならない。私は決して高級な言い方であゝだ、こうだと云わない、個人も本體、全體も本體という所で落

つけております。佐藤一齊が、一燈をひつさげて暗夜を行く、おそろゝ忽れといったように、餘り先まで見とおすような高遠な事は云わず、上述の今わかつておるような事で足許を照して行けば、不安もなく、やがて理想へと達しうると信ずるのであります。

そこで、この個人と全體ということについては、今日日本の考方として憲法十二章に書かれておるのであります。

第一は我々は自由の權利を持つことである。尊ばるべき本質を持つのであります。

第二は個性の亂用をせぬ。道理以上の事をして他人の自由權利を害してはならないのであります。全體の幸福を考える事である。昔中國に竹林の七賢とか、清談の徒が、權力に阿ねらず俗を捨て山に入り、人に交わらず自由勝手に風流を楽しんだというが此はどこか魂が抜けております。人は世の中全體のために生きねばならないからであります。

第三は個性の自由、權利を公共の福祉に使用する責任があることです。私の友人に宮城の堀端を歩かぬという人がある。それは、もし人が落ちたら飛込んで救わねばならないが私は泳ぎができないから君子危うきに近よらぬのだといつておる。此は冗談としまして、とにかく個人の權利というものを積極的に他に對しても考えねばならない。このような事は東洋道徳では珍しくはないが歐米には少いのであります。此點我憲法は特色を持つておると思われる。

以上、四期にわけて歴史的に社會、人間生活のよい所を見て參りましたが、要するに個人と社會との調和に立つべきであります。國

家團體のために個人を無視するのもしけないが、又、個人のために團體に迫るには相當要心すべきです。

更に之に對し、私の思想をつけ加えますと、從來の平等という考え方には、幾分、人は誰でも同じ欲望、心を持つておるといふ惡平等に立つてゐる點があると思ひます。例えば論語に、己れの欲せざる所を人に施すことなかれ、己れに爲されんと欲する所を人に施せという文句があるが、人は同じ性質、欲望を持つという考が支配している。しかし、之の文に別のものを挿みたい。即ち己れの欲せざる所を人に施せ、己れの欲する所を人に施す忽れと云いたい。例へば、私は酒は嫌で飲みませんが、友人が訪ねて來て飲もうと云つたとする。私が飲みたくないからと云つて、お前も飲むなとは云えないので、適當にやらねばならぬ。このように人には或程度個性がある。歌の好きな人もあれば相撲の好きな人もある、どちらとも云えぬ、己れの欲せざる所を人に施す事があるわけです。民主主義は、我を生かし、他人を生かすもの、だから、自分の望み、よいと思うことを無暗に人にすゝめる事は避けねばならない。田舎へ行くと、無理に御飯を強いる、之が向うのエチケットらしいが、こちらはたまらない、我にめしを與うるなかれ、我に自由を與えよという事になる。

このように個人と全體とが調和して生活のより所を作るが、今述べたように、人には個性があるのであつて、從來の社會的惡平等に立つことは避けねばならないと思う。

新年の希望

椎 尾 辨 匡

昨年は佛教の實際面として、淨土教の養老事業——念佛による敬老事業、佛青運動の復活——念佛による、乳幼児の保育に伴う佛教運動の三を念願したが、いづれも一歩二歩すゝめたる事を感謝する。

その第一、東京養老院が藤澤分院に於て、全員の朝夕の強烈な念佛生活は、各人も全體にも復活を與へた。内外の驚嘆と注意とを喚起し、模範的養老事業とされるに到つた。それは國內他宗の養老施設に、信仰と慰安と尊敬とを中心とするものともなり、又老人の日の制定に伴う全國の敬老の催や新しき施設の發達となつた。第二、戦後以來中絶せる佛青が再編成を見るに當つても愛知佛青が先驅となり東京に於ける大會並に各地區に於ける佛青編成を促進した。之は勿論通佛教である。その宗教的意識を強めるに従つて淨土教が濃厚となる。たゞし、青年の血肉となり實力となる淨土教がまだ充分に把握されぬ所に佛青運動の充分にのびかねる點が存する。其はキリスト教の Y・M・Y・W に比較して考へられたゞけでも理解され

る事と思う。第三、幼児保育の事業には戦後最も力をいれた所で昨年は保育方法の改善、施設の増加についてもめざましい發展をした。即ち昨年々頭に念願した三大事項は佛教者が多くは題目を掲げて實行しなかつた過去にくらべて著しく改進したもので、佛天に對しても、努力し應援した人々に對しても甚厚なる感謝を捧げるものである。

中年の佛教人の團體的行爲は戦後、徐々に發達して、一昨年は、すでに幾つもの擡頭せるを見たが、昨年に到つて、平和に對するもの、國際佛教としての動き、國內の佛教徒會議、福祉團體等も講和克復とともに著しく生長した。しかし此面が特に淨土教として中堅力となつたとは認められない。即ち中堅人に對する淨土教の動きは平凡事に終つたと見なければならぬ。かように昨年の事を回顧し反省すると共に、本年は次の數點に於て新しい明確なる指導と進出とを希望する。

その一、日本淨土教の大先達は法然上人であり、その特色を闡明

する事は今の時代に大きな指針を與へる。それは一、上人が大众的人間生活の宗教を明かにした事であり、二、殺伐鬭爭復讐の間に立つて、此を超越せる平和の建設に努力した事であり、三、佛教の宗教的満足を發揮した事である。この三點は今世界が更に受けなおさんとしてゐる問題である。上人の逝きてより七四九年、來五〇年に劃期的の大御忌を営むに際し、前十年間を勸誘、經營・促進の時間とすべきであつた。即ち明治四十四年、七百年御忌を迎へるに際し、三十五年には記念傳道、淨土宗全書出版、記念興學會の建設、教育制度の整備とし、特に中學制度の確立、佛教教育の革新等の案を定めて、その實行に努力した。勿論それには三十二年頃から、それぞれ準備せるものでもあつた。しかるに今は、戦後、内外の事情を異にするためでもあるが、全く全局に協力し準備されておらない。今年は何んとしても、この事を具體的組織として少くも前述の三方面に於て、法然上人の模範に従つて新たに時代の光明たらしめる努力がなければならぬ。

第二には近年分裂し紛糾せる宗狀は漸く收拾解決に向ひつゝあるが、前項とも關連して法然門流に立つものが大局から一致協力する事につとむべきである。即ち法然門流として上人の人間的大衆的信仰生活に於て、未來まで同じく往生を得る事を確信しつゝ現實を充實するには同行同信の組合生活が發達しなければならぬ。殆ど個人の願心と往生の満足とを信じておるが見えて當時から否定されたる小乗信仰に墮落したとも云へる。此の世も後の世も等しく彌陀の大慈悲心の中に融けこんで協力する實際を建設すべきである。

次には上人の生涯はその信仰も教化も指導内容も常に進化してゐる。おそらく門下もその影響によつた。諸學の革新も新宗の續出も當然の影響と云うべく、もし元寇の一戦にこの鎌倉文運が挫折する事なくして大法然主義が展開したなら、世界の人間宗教運動の最も大きな成績を六、七百年前に築きえたらう。其が空しく今日に待つたと云はねばならぬ事は遺憾であるが、今後は大法然義の生々とした進歩即ち全人類は、その日常科學生活の上に、永遠の進歩への歩みたる事を信じ、南無阿彌陀佛に協力するものとなすべきである。

又、上人の思想の推進に伴つて、種々の陰が残つてゐる。何も六十才代のもののみを偏執して前後を排斥せねばならぬはづはない。南都北嶺の念佛化も、安居院西山も一念法悦も、收めて互に協力し佛教の宗教的運動を完全ならしむる事につとむべきである。之は過去七百年間になしえなかつた大法然義の實現として今や着々と顯彰されんければならぬ事である。

第三には佛教がその宗教面を發揮するべき淨土門たるべきものとして明白にすべきものが少くない。即ち原始佛教に於ける釋尊及びその周圍のものの信仰生活、特にその念佛生活、佛教が有する哲學的特色と、之に相應する淨土教とは、まづ明かにさるべき緊急要件である。原始佛教と聖道門哲學が、佛教の主體の如くなされて淨土教の信仰、念佛が阿含等の古い經典や般若實相瑜伽等の教理と別箇の遊離法門の如くされている事は、此までの缺點である。此は全ての佛教をしびれさせ、萎縮させてしまふものである。その淨土門的内容が明かにされる事によつて、阿含佛教でも聖道教理でも、本當の佛教としての活氣を見出す事ができる。

次には淨土教が善導法然二偉人によつて研修されたが、法然上人

以後には二、三の發達を見るも大體は萎縮し硬化して眞の生命と發達とを失つてゐる。今は直ちに釋迦、菩薩、法然の三國佛教の大光を更に擴大して、教育に産業に人生社會の新歩に具現すると共に、あらゆる貧苦厄難を救ふ事實を全うすべきである。

教育は前云う理論と全佛教との伴へる淨土教たるによつて眞の教育を導きだす事が出来る。産業も利潤追求でなく、彌陀の大生命による萬物の發達を満足する事によつて眞の産業發達がまとめられる。人間社會は競争殺害の舞臺でなく大慈悲中に攝化せらるる人類が各々業務を分擔して、その對象を増長し發達せしめて世界の進歩を全うするによつて淨土の功德莊嚴成就を見る事ができる。三部經に成就したる淨土が、ある時の文學・構想・施設たるに止つて今の實際の指導施設とならないのは、茲に云ふ教育産業社會が指導されないからである。

以上は淨土教が、今指導し實現せねばならぬ主要な事件である。殊に本年少くとも相當の歩を進めねばならぬ事である。多少、抽象にすぎ、實際に疎いと思う人もあらう。その全てを何人もが全うされるというのではない。しかし、淨土教に因縁あり、興味を有する何人もが各々その適する一分を充實されたならば、必ず彌陀攝化の中に法悦と道行とをすゝめる事と信ずる。

最後に、佛教としてなすべき事は多く、前年の計畫を満足するとその缺けたるものを補充すると、各宗・各寺・各人が佛教による信仰生活へと努むるやうにする事が第一條件となる。なぜならば、本年、三、四月に講和批准による國際も、たとひ、之に加はらざるアジア諸國・ソ連關係諸國も皆、新しき關係によつて密接する。之を正しく結びつけるものは信仰による提携一致である。佛教徒として

その力が出せなければ、他教がとつて代つて、他教徒として之を出させるであらうからである。

又、思想的に今の世界が混沌たるは人皆これを云ふ。十八世紀の唯心論は十九世紀來の唯物論に壓縮された。今は唯物論旺盛のやうに見えるも實は破綻と行つまりとに陥つてゐる。佛教は之を超越した色心一如とか、内外空とか、諸法實相とかにすら、すでに優越が示されておる。しかし、此等の佛教哲理が正しく扱はれておらない。従つて寶刀を持ちながら、邪魔を拂ふ事ができない。もつと正しく佛教の哲理を示して世界を導くべきである。昨年十一月駐ソ米大使カークは造物主が萬人に自由と權利とを與へた信仰が自明といひ、ソ連が宗教は阿片なりという事を攻撃しておる。之は同大使のみのいう事ではない。冷戰界につねに云はれる所であるが、造物主は云々も一つの偏つた信仰である。ソ連は東ギリシャ教朝たりしロマノフ家を倒した以上、その舊宗教に固着せんとするものを阿片として退けるも一政策である。いづれも中正でない。此等を集めて更に正道に導くべき必要が起きる。これ正しき佛教教理の急に明かにさるべき所以である。

又、今日の世界平和への努力の必要な時はない。この後半世紀を平和たらしめば幾萬年にも見ざる文化の進歩を全うすることができ。一切の主義、教派を越へて平和建設が最も大事である。共產平和のためにまづ戦争をというが如き平和論は眞先に排棄して眞の平和を勤むべきである。勤むれば必ずその効果を上げる事ができる。しかして、佛教こそ正しき平和の主張と實現とに適する。特に宗教的淨土教的佛教が發達するに従つて、その効力が大きい。(文博・増上寺法主)

年末年始の宗教習俗

中 村 康 隆

年を送り、年を迎へる毎に、露川の句ではありませんが、「來る年は來る年はとて暮れにけり」といつた感慨は、多少ともない譯にはまいりません。それにつけても、年の瀬毎にいつも私は、清少納言が『枕冊子』に書きつけている「ただ過ぎに過ぐるもの帆かけたる舟。人の齡。春、夏、秋、冬」という言葉を想い起すのです。帆かけた舟は遠目には動くと見えませんが、さて氣がついてみると、いつの間にか彼方へと消え去つていきます。私達の命も、年月も、全くそのようなものだと感ずるのも、あながち私の年とつたせい許りではないでしょう。殊に昨年は、朝鮮

の動亂を初めとする世界情勢の激しい雲行のためでしょうか、とりわけてあわただしい年月だつた氣がいたします。しかし、そうした生活感情のあわただしい明け暮れのうちにも、やはり時が來れば來たで、昔からの仕來り（慣習）だけは、忘れがたく繰り返されてゆくのが常であります。そこに習俗の生きる力があります。傳統の強みと申しましょうか、こうして繰り返されてゆく習俗のうちに、日本人の傳統的な生活意識が永く生き續てゆくのです。勿論、習俗には消長があります。それは多く技術的な面で、根本の心持と結びつく部分は案外なほど古い形が残つてい

るものです。

明治になつてから廢れた歲末の宗教風俗の一つに、節季候せききこうがあります。二人或は四人と組んで、裏白の葉やシメなどをつけた編笠を被り、赤い布で顔を覆い、四ツ竹で拍子をとつて祝歌を唱えて廻つた、一種の乞人態こじんたいの門附けで、文政年間の書物である山崎美成の著した『民間時令』には、京都では二十日から二十八日、江戸では二十八日から歲暮まで出るとありますが、『駿國雜誌』（天保十三年、阿部正信編著）には朔日から三十日まで出るとし、節分の厄拂い同様多くは静岡在河邊の番太の類がなつたといい、その唱え歌などを記しています。これが廢れたのは、鳥追いなどの門附けが次第になくなつたのと軌を一にするものでしょうが、殊に町家の暮が昔よりずつと多忙になつたため正月の萬歳や獅子舞ほどに迎えられなくなつたからでもあります。時期としてもこれが荒神祓いとからむ嫌いがあつたからでしょう。

荒神祓いというのは、今でも日蓮宗で、二十日頃から二十八日にかけて、菩提寺の和尚さんが檀家を廻つてかまど竈を清めて歩くように、廿八日の竈神の祭りの佛教化した風習で、俗に竈祓かまどはらひいともいつて、法華以外では修驗者と

か乃至は禰宜さんや巫女が行つていたものでした。元來、家族生活は竈を中心として営まれたものですから、洋の東西を問はず、家族的宗教の中心が竈に置かれたのは當然のことであります。従つて上代の日本人も竈神を以てヤカツガミ（家神）即ち家々の主祭神と仰いだのでした。それで一年中の最も大切な家々の祭りである正月様を迎える爲にも、まづ以て竈を祭り竈の火を淨める必要があつたのです。上代人の家庭的信仰の古い姿は、こうして今に荒神祓いの習俗として續いてゐる譯です。殊に廿八日は、大高源吾の煤竹賣りの話にも知られる通り、民間では煤拂いの日とされて居り、また此の日を餅搗きの日として、翌二十九日の餅搗きを苦の餅として忌んでいますのは、一に二重苦の語呂からかく解するようになつたものでしょうが、その元來は廿八日にすべきものとの意味を強調する所にある譯ですから、此等の行事も、つまりは家を清め、家の火所を清めて、先づ年神へのお供えを作るといふ心持から來た習しといえましょう。こうして大晦日までの間にどの家でも松飾りやメ飾りをし年棚をしつらえて正月の來るのを待つのですが、中には松飾りの代り

に櫛や櫛を用いた例も知られています。幕末に出來た『古今要覽』を見ますと駿河の藤枝邊では正月に櫛を充つるとありますし、『駿河志料』（文久元年中村高平著）にも庵原村の豊積神社の社人であつた西ヶ谷氏は門松に櫛を刺すと記しています。要は年神を迎えるに相應わしい祭場にすることが本旨なのです。

しかし清めるのは家の内外丈では足りません。祭る人の身と心も清らかでなければなりません。平安朝から室町期にかけて、通例十九日から三日間、時には一日のことも一夜の時もありましたが、宮中でも盛んに行われた佛名會は、三世の諸佛のみ名を唱えて罪障の懺悔をする悔過の法會で、十二月の異名の師走という言葉も、このお佛名に當つて法師らが忙しく走り廻るから師走すと記すのだと、藤原清輔が奥義抄（平安時代の歌學書）で説いている程です。勿論これは漢字の充字からの説で、師走の原義は、新井白石などの言うように、年果つ即ち年終りの月の意味なのですが、それは兎も角として、今はこの佛名會も僅に寺々の儀式として伝えられている許りですが、その精神はなお百八煩惱を消滅せよとつく除夜の鐘に鳴り響いている譯です。大

晦日に神社で催す大祓いも、六月の夏越の祓いと並ぶ古い行事として、明治初年に再興されたものですが、やはり新年を迎えるに當つて身の汚れを祓う意味ですし、例の大神宮から配られる大麻も同様に祓い札なのです。そして除夜の鐘は、いわば此の大祓いの佛教的な形態とも言えるでしょう。

こうして愈々年越をする譯ですが、此の晩は家中揃つて年越の祝膳につきまた年越蕎麥を食べますが、それには柳の箸を用いる習しがあります。磐田市の二之宮では、暮の大掃除の終つた晩に、柳の箸で大根・里芋・人參・油揚げの煮物を食べ、同じ箸を年越蕎麥にも、また正月七日の夜と十五日の朝にも使うのが習しだということです。それは柳が古來芽出度、祝の木とされたからで、つまりこうして祝の食事をすることによつて新しく生きる力、生命の祥を獲ようとするのでした。年越の改まつた食事を一にお節とも年取とも呼び關西では麥飯に赤鯛、關東では蕎麥が例とされていて、麥は二年に亘つて作るものだから麥を食べて無事に越年しようといふのであり、蕎麥は一名運蕎麥ともいうように運よく長生きするためだと申しますが、元來は正月

の粥や雑煮と並んで田畑の作物で新しい農耕の年を祝おうとしたに外ならないのです。柳箸も、元旦の壽詞に「柳の下（しおのした）の御事は。さればその事芽出度候」と唱える習しがもとばあつたことにも伺えるように、特に生成力を認められた神聖樹なのでした。

また、俗に年越の晩に早寝すると白髪になると戒めて長起きする風が今も見られますが、元來それは年の夜に年籠りと申して社寺やお堂にお籠りして年を迎えた名残りなのです。『駿國雜志』には由比の町屋原の豊積神社では三十日の夜から正月二日の夜明けまで十歳から三十歳までの男達が詰めて太鼓を敲きまた新婚の家を廻つて悪態をついては振舞つて貰うとありますが、この風は今も舊正月三日間の太鼓祭りとして知られています。濱松近在の村でも新舊月送りの三度の年の夜に年籠りする風が盛んで、中には悪口祭りを伴つて悪口競べに勝つた者や村方は運がよいなどというそうです。此の悪口祭りは、元來はそうした年の運を占う意味よりも、やはり忌籠りに附随する歳（とし）の變形であつたと見るべきものでしょう。

こうしてお迎えする正月神は、通常年神様

と呼ばれ、後には陰陽家でいう歳神（としがみ）と同一視されるようになりましたが、もともとトシという言葉は稻を指すものですから穀物の神だと解釋され、従つて記紀や延喜式に見える大歳神（おほとしがみ）や御歳神（みとしがみ）であるとも見られていて、静岡浅間神社の相殿に祀られている大歳御祖神（おほとしみそと）は俗に歳徳神だとされている位です。然し一般常民の正月神の祭り方を廣く仔細に眺めてみますと、決して斯様な特殊の神格をもつた神様ではなく、極めて廣い性格をもつた神らしいのです。『徒然草』などを見ますと、古くは年越の夜に魂祭りする風があつたことが知られますし、その外薩摩の南の七島正月などのような先祖正月の遺風とか、最も古い正月である小正月を佛正月として祖先を祭ることなどから、年神様の眞の姿が先祖の御霊だつたことが、漸く近頃になつていわれるようになりしました。正月の祭りが實はお盆と同じ先祖の祭りだつたことは、尙お歳末の宗教風俗にも判然と伺えるところです。最近の報告によりますと、遠州の天龍村では大晦日に墓の掃除をして松竹梅の小枝を輪飾りにつけたものを墓に飾り、花立にも松竹梅をあげ、家の御持佛も此の日にお掃除をして松飾りをし鏡

餅を上げますし、また正月の二日には御先祖に供えるためにお寺にお供えを持つて行き墓詣りをしてくるのが習しだということです。暮に墓参りして輪飾りをすることは、『安倍郡誌』にも見え、廣く行われていることです。四國には佛の正月といつて年内に死人のあつた家は暮に取り越して墓に松を立てて正月祭りをする風があり、徳島縣では正月だけ家の佛様をミタマ様と呼んでいますが、駿河の駿東郡では年神に供える正月の三寶飾りの米をやはりミタマと言つていいます。またミタマの飯を佛壇に供える所は多いのですが、關東東北から信州にかけてはこれを年棚にお供えしています。所が佐渡では暮に鏡餅と共に寺に付け届けする米のことをミタマと呼び、盆の付け届けも同様に呼んでいるのです。年の暮に盆と同じ様に御先祖の供養の爲に寺に付け届けをして墓に詣り、正月にも氏神様や寺に初詣りする風が廣く行われていたのも、全く正月祭りが先祖祭りだつた證據と言えるのです。新しい年を迎えるに際して、今日無事に生き得ることを先祖に感謝し、来る年の幸をも祈るのが、日本人の變らぬ心情だつた譯です。

「浄土」有縁の人々 (二)

藤 井 實 應

(十月三日、木)朝、卓爾君に送られて静岡發、茅ヶ崎下車、牧野英一博士御宅へ。十二時半頃着、博士は東京へ出かけられて不在、奥さんは御病後であるが御元氣であつた。東京から成瀬慶子夫人、杉本なほ夫人、茅ヶ崎から山田文子夫人御出席で、何方も牧野清子奥さんと格別御懇意の方々で、私も、かねてから信仰をとほしての知人、けうは牧野奥さんの御見舞をかねての座談會となつた。牧野奥さんは終戦後カトリックの信仰に入られた。前からの御因縁によつて、終戦後も度々寄せて頂いている。カトリックに入られてから初め暫くは、自ら祈禱が出来なかつた由であるが、御祈禱を自ら修せられるようになった。てからは急激にぐんぐんと深い信境に進まれ今日は誠に有難い信境にあられることは私にもよく念じられる。博士御夫妻は世界中の宗教遺跡を巡られており、宗教的な偏見にとらわれることなく、自らの信を一筋に進められている。博士は飛彈の御出身でお家は眞宗であるが、宗教に對して御理解が深く、いつも教えられることが多い。いつも實際の問題を中心に信仰を味う話が出る。けふは平常の念佛、還愚痴のことなどお話した。「念佛にいさみある人は無量のさとりを開くべき人なり。念佛にものうき人は無邊の實を失ふべき人なり、相かまえて念佛をば相續すべし」の元祖の御法語を語ると、牧野奥さんは、それは私一人の上に味わせて頂きますと申された。深き信仰の體驗ある人は、その御法語の眞髓をうけ、味おうてゆかれるのである。成瀬さんは蓮月尼の研究家で蓮月尼の著書もある、お家は眞宗、杉本さんのお家は金光教、山田さんのお家は日蓮宗、御主人は長井眞琴博士の親友。宗派にとらわれることのない方ばかり、一筋に道を求め進められ、それぞれの道を進みつゝ、同じ高嶺の月を見る。青色青光、黄色黄光、うちとけあうて、共々によるこび、淨められてゆく、まさに浄土に近いすがたである。山田さんは麻布專稱寺の念佛會から、他の方は金光教の高橋正雄先生の御指導によつて佛縁が出来たことも有難いことである。四時半頃辭す。次で

鎌倉の米山芳さんの御宅へ。米山さんは布教講習所時代、建長寺の臘八接心に參つてからの同信、菅原時伴老師に長年參禪、熱心な

信者である。坐禪をやつてやつてやりぬいて、坐禪した顔もしてない、坐禪から抜けきつておられる、坐禪もこゝまで来るとよいなあと米山さんにあう毎に念ずることである。今度佛教文庫本中、時伴老師の「禪に生きる道」の出版につき共に努力したのである。米山さんの父上も祖父も熱心に参禪せられたとのこと、ローマは一日にして成るにあらずの言葉は信仰の上に於ても味われることである。いろいろと浄土念佛のことにつき問はるゝまゝにお話をする。米山尙志氏にもあう。一泊お世話になる。

(十月四日、木) 鎌倉建長寺の菅原時伴老師を訪ねる。最近老師の著「禪に生きる」が出版されたに就て御禮を申上げる。本年八十七歳の御高齢、毎朝三時起床、四十數年一日も變ることがないという御精進、益々御健康の御様子、「どうか浄土宗の山下現有僧正のように少くとも百三歳まで生きて下さい」と申上げると、「さあ百三歳まで生きられるかな、年とつて恥をさらすのも考えものじゃ、しかしおかげで耳も達者、眼もよく見える、足が少し思うようにならぬ、明日は佐野まで法要に

ゆくことになつてゐる。ずいぶん招待があるがね、法要には行くが、飲食の集りには一切お断りしている、飲食のことで多くの時間を費すのはつまらぬからね」御覺の通り、建長寺山門も三〇〇萬圓で修理が出来た、御開山(關溪道隆禪師)のお徳は廣大なものさ、更にお釋迦さまのお徳は限りがない、お釋迦さまを看板にすれば、ちゃんと物事は出来てゆく有難いものだね」「芝の天徳院といつたかな、そこで覺夢鈔の講義を聞いたことがあるよ、それも六十年前のことだがね」「鎌倉には轉法輪行念さんのようなお徳者が亡くなられてさびしくなつたよ」など、お話がつゞく轉法輪行念師(鎌倉大佛)の御紹介で、布教講習生と共に臘八に参加したのがたしか昭和十年で、それから前後合せて六回臘八に参つた。「あんたの宗旨は阿彌陀さんを信仰する宗旨じゃ、その阿彌陀さんとはどんなお方かこゝへもつてきて、はつきり示しなさい」というのが私共への公案であつた。獨參の時、「阿彌陀佛とは……」という「そんな説明はいらぬ、阿彌陀佛そのものを出せ」といわれる、時には「そんな阿彌陀さんがあるか」

と叱られる。朝念阿彌陀佛、暮念阿彌陀佛、たゞ阿彌陀佛を念じ念じて阿彌陀と一體になる以外に道はないものと、たゞ南無阿彌陀佛で一貫した。第一回の臘八の終りに近い頃、それでよろしい、その一筋道で貫きなさいよ」とはじめてお許しを頂いた時のよろこびが昨日の如く思い浮んでくる。「私は老師から教を頂いてからも南無阿彌陀佛一筋道でやつて来ましたし今後ともこれで一貫してゆきます」と申上げると「七ツ道具を身につけていては進まれぬ、一筋道に限る、お念佛がいゝよ」と仰つしやる。長年教を頂いた記念に名をつけて頂けませんかとお願い申上げると、早速筆をとつて「お釋迦さんは大仙と申上げる、わしは壽仙と呼んでいるが、わしの一字をあんたにあげよう」と申されて「法仙」と書いて授與下された。私は有難く頂戴した。「大法の爲に共に働かうぞ」諸行無常、老少不定じや、からだに氣をつけて大法の爲に働いて下され、わけのぼるふもとの道はちがつても、同じ高嶺の月を見るのだから「またちよいちよいよつて下され」實に御懇切鄭重、然もさつぱりして何のわだかまりもない、有難い極

みであつた。老師の御健勝を心から念じて辭す。

午後東京、豊島、要町二ノ二二の錦戸新さんを訪ぬる。日展の御出品の身長七尺の大不動尊の製作中であつた。錦戸さんは故高村光雲さんの高弟で、復員後は感ずるところあつて、殆ど佛菩薩像を専らに製作されている。既に出来あがつた観音像等を拜しつゝその苦心心境など承る。人々から拜まれる佛像をつくる人は、自ら拜む人でなければならぬ。香木によつて彫まれた聖観音像の前にたゞずむとおのづから合掌低頭される。拜みに拜んで作られるのである。今も毎早朝起きられて一時間半ほど佛間にこもつて勸行せられ身心を淨めととのえられてから製作にとりかゝるとのことであつた。不動尊の構想が出来上るまでには栃木縣の某處に瀧にうたれ一心に不動尊を祈念し修行をせられた、その間の消息は文通等によつて知つていたことであるが、今眼の前に製作中の御像を拜し、製作の道場に參つてその念を一層深くする、拜みに拜んでつくられた佛像や佛畫こそ心から拜まれるものである。錦戸さんはいわれる。観音さまをつ

くるときに、一心に觀音經を讀誦し、朝念暮念ひたすら觀音様を念じておられた時、ありありと觀音様のお姿を拜することができ、觀音とは汝自身のことぞとの啓示をうけて感激極まりなきを覺えた。その深い信境がうかゞわれる。暫く信仰を語りあつたが、やがて錦戸さんの案内にて、世田谷區三軒茶屋の島崎病院へ。院長島崎君枝さんは錦戸さんの導きで觀音さんの熱心な信者である。昭和二十一年十二月にこの地に家を買ひ、それを基に獨力今日の病院を築きあげられたという。「仕事は生命なり」仕事にこそ眞に生きた信仰であることを身を以て體驗し、患者さんを拜みつゝ治療に従はれている。看護婦さん達もおのづから院長さんの心をうけて患者さんに親切にいそ／＼と働かれています。七、八月の頃九品佛に於て信仰養成講座が開かれていた時島崎さんは九品佛の觀音堂に殆ど毎日のようにお參りになつていた、そしてある時、九品佛に於て錦戸さんと島崎さんと九品佛住職清水順頤らと信仰座談をしたことがあつた、それが今日御うかゞいする縁となつたので、思へば觀音さまの導きというほかはない。佛教

のこと、信仰のこと等いろ／＼とたづねらるゝまゝにお答えをし、またいろ／＼と體驗のお話を承つて時の過ぎゆくも知らなかつた。夜は錦戸氏と共に島崎さん方に泊る。

木魚

木魚は 元來、長い魚の形をした木の太鼓のやうなもので、色々の合圖に鳴らしたが、後に首と尾を接合し、腹部を空洞にしたものが考案され、讀經の時敲くやうになつた。今では、一身二頭の龍が一つの珠を含む形になつている。なぜ、清淨の佛教用具が魚の形をしているかという、百丈清規の註に「魚は晝夜常に醒む、木に刻して形を象り、之を撃つは昏惰を警しむる所以」と書いてある。龍を刻したのは魚が化して龍となるのに因んで、我々凡夫が聖者に變ずるやうにという意味だといふ。この木魚が二十年程前、太平洋を泳いで渡り、ジャズの打楽器ともなつておりますといへば魚の目のやうに目を丸くなさる人もあらう。

永遠のいのち (三)

佐藤良智

永遠のいのちのみくには、ひらかれました。無量壽佛のみくに
は、美わしの華の如くにひらかれました。いざ、もろびと、このみ
くにへ、生れゆかう。このみくに、淨土に、生るものみな、ただ、
一つに定まりて、とわのみ壽に生きどうしに生くという。淨土こそ
は、われらのあこがれ、われらの、ふるさと。

さて、經説の下巻に入る。上巻は、上に述べましたように、釋尊
が、無量壽如來の、お淨土をお示しになるありさまを、法藏ぼさつ
の御發願、御修行と、そのご修行の成就と、み命のくに、お淨土の
・御開示という、順序で書かれていました。下巻には、そのお淨土へ
もろもろの人が、どうすれば、生れることができるか、生れた結果
はどうなるか。そして、どうしてもこのくにへ生れなければならな
い、いきとし生けるものみな、この永遠のみのいのちのうちに生れか
わるよう、世尊は、おすすめになつた。

さて、この無量壽佛のみくに生れるにはどうすればよいか。

經文に、

あらゆる衆生、その名號を聞きて信心歡喜し、乃至、一念し、至

心に廻向して彼の國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得。
と、胸つかれる、有難いおことばによつて表現されている。いつた
い、その名前をきいただけで、こころむせぶ、といふような、こと
があり得ようか。それは、ありうるものが、希有のことである。

この、お淨土の、眞理は、凡そ二通りの道を通つて、人間に深く
せまるのであります。その一つは、生れながらにして、こころ素直
な、恵みにあふれた、よき人に開かれた門であります。釋尊のみ教
えが、そのままに、即座に受けいれることのできる人に開かれた門
であります。無量壽佛―かぎりなき、おん壽に、生きどうしに生き
給ふみ佛―の御名をきくだけで、法藏菩薩の歩み給える御物語りに
よる、眞理への道を聞くのみで、こころ、おどる。よき人には、永
遠の救いの道が、平らかにひらかれている。ひと聲、なむあみだぶ
つ、と、み名をとなえ、かのみくにへ生れたいと願えば、往き生れ
ることができるのであります。

他の一つの道。この道は遠く、平らかではない。人の生きるみち
はけわしい。ただ、その日一日のからだをささえるだけでも、たや

すくはない。まして、眞實に人生をみつめ、本當に生きることとなれば、言葉に、あらわすことのでない程、けわしいものであります。いにしえから、如何に多くの人が、悩み、求め、失望し、落たんし、或は、悶え、或は、苦しみ、或は自らを亡ぼし、或は愛欲の泥沼に落ちて行つたことでありましょう。今、現に、定まらざる人生に、悶々たる人が數多くありましょう。まことに、釋尊は、申されました。人生は苦なり。と。また、三界（この世）は火宅の如しと。人は、疑ひのところに満ち、不安のところにをのく。人の悲しき性であり、人類の痛ましい宿命である。しかしながら、この絶望の淵は、よどんで、流れざるものでありましょうか。絶望の斷涯は、永劫にそそりたつものでありましょうか。人類のあるかぎり、絶望の斷涯は、ありましょう、火宅はありましょう。しかし、その火宅に窓はないでしようか。絶望の淵は開かれて、希望の大河となり得ないでしようか。その窓、その河こそ、眞實の宗教への門であります。他の一つの道と、私が申したのはこの道であります。たどたどしく息苦しい道でありました。絶望のゆくてに、突如として、光り輝き給い、かぎりなきおんいのちと、かぎりなきみひかりにして、大いなる救いのみ手をさしのべ給う無量壽佛。生き通しに生き、常に満かに、常に眞實のちえをみちたたえ、常に溫きおん慈悲のみ手をさしのべ給う—あみだ、みほとけ。そのみ名を聞くだけで、信心、歡喜のところにむせばずには居られません。一こえの名號、なむあみだぶつ。この一聲こえは天地を貫き、生死を超え、さえられぬ大道にひびきわたるものであります。天地の生命に通ずるこの一聲二聲な

いし、無量。まごころをこめて、永遠のいのちのみくに生れようと願うならば、生と死とをこえて往生することができ。もろびとの、往生の因となるものはこれを外にしてはない。實に、天地宇宙を貫き永遠のいのちにまします無量壽佛のみくに、生き々々生れるには、常に、常に、聲を通して、からだところをもつて直接、そのおんいのちにふるのみであります。絶望から希望。闇黒から光明へ。この道のみが人類の救いの道であります。無量壽佛のましますところ、「天下和順に、日月清明、風雨時をもつてあり、もろもろの災起らず、國豊かに、民安く、兵馬用ふることなく、徳を崇び、仁を興し、務めて、禮讓を修す」この經説の文の如くであります。

この道は、法藏菩薩の御意志を通じて、知られるように、天地宇宙の大意志、大本願であります。この大意志に裏づけられました稱名の一道。これが淨土佛者の信念と實踐であります。

ここに、更に、世尊は、詩をもつて、のたまわく、東、西、南、北、四維、上、下、天地一切の眞實の求道者なるもろもろの菩薩が、無量壽佛のおんいのちの世界に集り、無量覺にましますあみだ佛を、妙なる華と、寶香と、こよなきみ衣をもつて供養したてまつり、或は、みやびなる音楽をかなでて、くらべもののない最勝の尊を供養し給う。ぼさつの申さるる、ああ無量覺のみほとけよ、

み佛は、こよなき力と智慧とを得給い
天地を貫く眞理の藏に深くわけ入り

かぎりない福と徳とをそなえ給い

比類のない智慧の火をもつて一切を照し、

ああ生と死の惱みの雲を消し給う、

われらも、猛き無上のところをもつて

この最勝の尊の如くあらしめたまえと。

その時、無量覺なるみ佛は、ほほえみ給い、

もろもろの菩薩衆よ、

すべてのものみな、縁起の故に

空なり、無我なりと知りて、

その故に、

淨きいのちのみくにを求むれば

わが、永遠のいのちのくにに

等しく生れることができるであらう、と。

更にこの菩薩衆へ、十方のみ佛はすすむるに、――

もろもろの眞實の求道者なるぼさつ衆よ、

かの無量壽佛の清らかなおんいのちのくにに生れ、

み佛にお會い申し、眞理を聞き、

樂しみて、み佛の御いのちのままに生き、

その清らのところを得よ、

その淨らのくににあらば、こよなき力を得、

必ず、み恵みにより、み佛のくらしいを得よう。

ああ、み佛の心からなる願いの力は有難きかな、

ひとたび、み名を念ずれば、

ああ念じて、永遠のいのちのみくに、生れんと願うならば、

もろびとへだてなく、

こぞりてみくにに到ることができ

自ら御いのちのままに生かされて、

生き通しに生きん。

幸なる哉 このみ教えを聞くこと、

前世に善を積み、よき日を送りし故か

ああ信じ、奉行せん 喜ばしきかな

人の身 受け難く、み佛の教えにあい難い

あふも信じがたい

今、これを聞け、精進して更に求めよ

ここに意を決すべし

たとい、大千世界に猛火あれくろうとも

その火をくぐり眞理を聞かん

聞きて、眞理の道に達し、

ああ廣く、生と死の流れにさまよう

もろびとを救わん、と。

中國の正月

安居香山

百八の鐘の音に去る年の悲喜哀樂を流し去つて迎へる新年は、毎度の世の常のいとなみと言ふものゝ、人々各様に新しい希望を持たせるものである。

除夜の鐘と言へば、佛教では百八煩惱をこの音と共に流し去るとか言ふが、中國では昨今この事を行つてゐるとは記録に見えない。

姑蘇城外寒山寺、夜半の鐘聲客船に到ると言ふあの有名な唐詩選にある張繼の詩の鐘は、勿論除夜の鐘ではない。

且つて戦時中、ラジオのマイクを通して、上野の寛永寺や、京都知恩院の殷々たる鐘の音と共に、蘇州寒山寺の破れた様な、しかも平たい鐘の音を聞いた事を覚えてゐる。占領して居た日本の人々が、遠い故郷の大晦日を想起しつゝ爲した事であつたと思ふが、この

鐘の響のない中國の晦日は、さぞ物足りない事であらうと思ふのは、異國人としてのいらぬ憂慮なのであらうか。

除夜の鐘で年を送り迎へするに比べて、中國では爆竹と言ふのがある。何連發かの痼癢玉の大きいと言へるであらう。元來之は竹を燃すとボンボンと節毎に音を出すのをを用ひたものであるが、今は紙で造られてゐる。

神異經によると、西方の深山に身丈一尺許りで山臊と言ふ鬼が居り、之に犯されると寒熱を病むと言ふ。この惡鬼は竹を燃す時に出る音を最も嫌ふので、惡鬼拂ひの爲に竹を燃したと言ふ。爆竹の起源はこんな所にあるらしい。

除夜の宵ともなると漸くこの音が激しくなり、時が過ぎる毎に益々その度を増し、眞夜

中ともなれば街々に百雷の如く響き渡ると言ふ。然し流石に元日の朝は靜かに明け、街通りには爆竹の殘骸が一面に散亂してゐる。中國ではこの散亂が激しい程、好い正月を迎へる事になると言ふ事である。

人の心の迷いを、一つき毎に拭い去つて行くと言ふ日本の除夜の鐘とは大分趣が違ふがこんな所に中國らしい所がある。

慶弔に縁起をかつぐのは日本人にも仲々多い事乍ら、中國の暮から正月にかけての行事には甚だこの事が多い。而も現世の禍福に敏感な事とて、數々の行事がこの事に關係する。

中でも最も重要な行事の一つである竈神の祭は、人の禍福を左右する事大なる故に、又祭も一通りでない。そして正月は實にこの竈神の祭で終始してゐるかの感が深い。

竈神には男女二神あり、男神を灶君と言ひ女神を灶奶と言ふ。灶君は善事を、灶奶は惡事を掌り、一家中の者の善行、惡行を數へあげ、十二月二十三日を總決算日として昇天し、玉皇上帝の御前に報告に行くのである。

中國の正月は、この二十三日の竈神の昇天

の祭から始まると言へる。

何人も幸福を求めぬ者は無い。況してこの神様の報告次第にて、來年の幸、不幸が決定するとするならば、正に一大事である。竈神昇天の祭が賑々しく山海の珍味を供へて行はれる事は當然である。

人々は「好多説、不好少説」(好い事はたくさんおとしやつて、悪い事は少しにして置いて下さい)と願いつゝ、特に祭壇には飴を供へる。その口をねばらせて置いて、惡事を報告させぬ爲である。之では善事も報告出來ぬ次第であるが、此處が無暗に祈る者の手落である。

竈神祭の近づく頃ともなると、街々にはこの飴を賣る店で賑はふ。或る旅行者が中國人に飴を供へる理由を聞いた所、神様にたくさん飴を供へると、食べるのに夢中になつて昇天するのを忘れてしまふからだと教へてくれたと。素朴な民衆の心からすると、餘程この方が筋が通つてゐる様である。

竈神は一週間後に下界に歸つて來て、人々に來年の禍福の判決を下す。すなはち晦日より元旦にかけて盛大に迎へられるのである。

已に遠く漢代に起源すると言はれるこの祭は中國の正月の偉觀であるが、考へて見れば又虫のよい話でもある。

之に對して祖先祭も行はれる。多くの現世利益の神々を祭るに忙しい事乍ら、流石に祖先崇拜を重んずる國だけあつて、この事も忘れない。除夜の折、家堂(佛間)に祖先の靈を迎へてより、正月三日に送る迄は、種々と供物をし、香を焚き、家中叩頭する。

或る地方では除夜に門外に出て十字路の所まで行き、聲高々と祖先の名を呼び、一人一人背に負つて歸つて來ると言ふ。

祖先を迎へるのは盆・彼岸であると思つてゐる吾々にとつては、稍時期はずれの氣もせぬでないが、考へて見れば祖先と共に新年を迎へるのが當然であるかも知れぬ。

祖先祭と言へば、正月三日間は日本と同様晦日に造つた料理を食べるが、これを「吃素」と言つて精進料理である。饅頭や麵がその中心を爲す様であるが、勿論之には肉等用いず油等も胡麻油を用ひるのである。

以上二三の事は中國の正月に於て、特に宗

教に關係ある事を拾つてみたものであるが、實は私にとつては未だ見ぬ異國の正月にて淡い夢想到に近い。特に近時革命後の民國は、こうした社會生活を根底より揺り動かされてゐるものであつて、從來の記録を辿つての紹介は、已に過去の遺物と化してゐる面も相當多い事であらう。中國の正月を書くと言ふ些細な事にもきびしい現實の反映がある事を、今更乍ら意識せざるを得ない。

この頃は、とにかく大衆の射倖心を刺激する競輪、パチンコ・たからくじ、復興くじ等が盛んである。所が、此は今始つたものでなく、徳川中期には、富籤といつて、屢々禁令を重ねるほど行はれたもので、面白いのは、寺社堂塔修繕の爲の富籤が多かつた事である。此は今までの寺院は政府の力でやつてきたが、幕府の力衰へ、替つて平民大衆の力が信仰界に伸びてきたことを示すものともいへよう。一時に百、二百兩と得るので、世人狂へる如く、中には買占めるものなどあつたという。

新しき道

藤井實應

○

有縁のまゝにあちこち巡教の旅に出る私は講話の前後にはつとめて座談會を開いて、接する人々から教を聞き、質疑も受け、要求も承ることにしている。そうした集りによく話の出ることは、お經を分るようにはしてもらいたいということである。經典の現代譯または意譯の要望であり、また法要等の勸行の改革の要望である。これはすでに以前からいわれ

い。なかなか容易に手に入らない。もつとたやすく皆の手に入るよう普及に努力せねばならぬことを痛感する。新日本として再出發した今日である、此の方面の積極的進出につとめたいものである。

○

次に勸行については、從來の異音の棒讀みではさつぱり何のことか分らぬ、少しでも分るように讀んでもらいたいとの要望が多い。本宗では増上寺本山にて、椎尾法主御指導の下に毎朝の勸行に、「四誓偈」、「歎佛偈」、「佛身觀」、「阿彌陀經の一部」の和譯文が讀誦されてゐる。光明會や共生會は早くから、大衆

と共に勸行する方式が採られている。都會と地方と、關東と關西と、その處や、人の異なるにしたがつて要望も異なるものがあるが、大勢は經典讀誦本來の意に歸つて、分るようにならね、勸行はみんなと共に一所につとめる方向に向いつゝあることはいうまでもない。東西兩本願寺をはじめ、個人としても金子大榮師等が新しく日常勸行(正信偈等)の意譯、普及につとめている、新分野の開拓、若き人々への傳道には是非ともこの面の新しい工夫が必要である。

○

これらと連關してよくいわれることは、佛教に關する書物はむづかしいということである。法律や哲學の専門の人が、何でもなくよく使う言葉も、専門以外の人には分りにくいと同じように、佛教術語も實にむづかしいといわれる。私は最近「佛教日常語解説」を書いてみて、そのことを一層反省させられた。經典だけではなく、佛教古典の現代譯をはじめ佛教を現代の言葉で分り易く表現する工夫努力が爲されなくてはならぬ。前に服部英淳師が選擇集の現代譯を出されたが、あのよう

に法然上人はじめ列祖著名の文書の現代譯がほしいものである。

キリスト教が聖書を數萬部も無料配布するようなことはできぬにしても、佛教文書の傳道も大に要望されている。印刷文書の力は現代文化の上に大きな地位を占めている。「淨土」誌が「淨土信仰シリーズ」を發刊し、この方面の要望に應えられているのは有難い。本年出版社から佛教文庫を出しているのもうれしい。佛教文書傳道に含まれるハガキ傳道は、最近相當普及して行われているようであるが、これは在家の方々に非常によろこばれ相當効果もあげているようである。月に一回位、佛説の言葉にふれ、佛説の教法にあふことのできる機會を與えることは教團人の任務でなければならぬ。人々はみなそれを要望しているのである。要望しながら、衣食の生活に追われてなか／＼にお寺へも參れぬ人の多いのが現状である。そういう人達にはハガキなり文書なりによつて佛教の縁を結び、佛道に進む機會が與えられねばならぬ。

○ 次に佛教の信仰に生きる人々は、みなこの

尊い教を若き人々に、子孫に傳えたいと願つておられる、これは當然なことであるが、最近キリスト教や所謂新興宗教の目ざましい進出があるので其意願は一層明らかに出て來ている。それだけが原因ではないのであるが、さうしたことを一つの縁として、各地に佛教青年の集いが盛上りつゝあり至日本佛教青年會同盟も再出發した。先年（昭和二四年）滋賀縣信樂町法林寺で、淨土宗のその地方寺院共同で、各寺から二名の代表青年を出席せしめて伊藤宏天師を講師として三日間の青年授戒が行われ大きな成果をおさめた。私はその翌年其地方の青年の集りに招かれ、その事實を見聞したが、さうした集りに參加した青年の共通の感想は「私たちは佛教に對して余りに認識不足であつた。私たちが今日眞實に生きゆく道を示してくれるのが佛教であるとは思つていなかった。これから友を誘うて共に精進したい」というよろこびの感想であつた。その時の集ひの形式は友松師の眞理運動の方式であつた。若い人々の集ひのやり方には眞理運動のやり方に學ぶべきものが多い小つぽけな宗派根性にとらわれたり、毛嫌

をしたりなどしないで、學ぶべきものは學ぶ改むべきものは改めてゆかねばならぬのである。友松師の神田寺を見學せられたなら必ず教化の上に學ぶものを與えられるであらう。それぞれ宗派の信仰を確立することは大切であるが、宗派にとらわれている時代ではない世界の佛教徒が一つになり協力して佛陀の慈悲平和の精神をこの世に實現せねばならぬのである。殊に今後は同信協力することが必要である。一人の力は偉大でも知れている。協力和合即ち價值本來の精神にたち歸ることが必要である。本年（二六年）の十月、大阪北區大鏡寺にて眞生會（淨土宗中堅の人達十數名が和合協力、研究、求道、教化につくしてゐる）主催、椎尾博士を講師に三日間の青壯年の結業が行はれ、非常な成果を挙げた。眞生會の人達（宗僧）が、各自の檀家から會員を勧誘し、その結業には全部參加して、司會、音楽、體操、勸行、事務、會計等それぞれ分擔協力した、開催前にも屢々會合してその勸行音楽等の練習まで行われた。參加した人達は皆、青壯年の人で大きなよろこびに満たされた。中で六十才位の老人が一人參加した、其

人の感語に曰く「お寺はこのような若い人達の来る處で私のような老人がお寺へ來てはづかしい云々」と。その結集の時間割、行事、作業等は共生會様式であるが、若い教化者の研究の結果新味をもつたやり方で、博士からおほめの言葉を頂いたという。私はその結果直後に眞生會員の方から直接承つたのであり前に眞生會の研究等に参加したこともあるので、それを聞いてこれある哉と隨喜した。絶えざる教化への研究工夫と協力活動を教界に要望している。この要望に答えてくれるところには佛教以外の宗教の進出は許されぬであろう。

○

新しい時代には新しい運動があらゆる方面から展開されてくるものである、しかしそれは從來行われ來たものから飛び離れたものは少ない、多くは今日迄築かれたものを基盤としてそこに一層改善進歩したものが現われて来るものである。佛教にもつと新しい佛教の音楽を普及してもらいたい要望は以前からあった。佛教音楽協會などあつて相當努力してきたのであるが戦争の爲一挫折を來した形で

ある、今や又新しい力でこの方面の活動がはじめられて來た。本宗の松濤基道氏等の活躍はめざましい。どうかよいものはよいものとして、みんなで、隨喜し、もりたてるようにし普及するに協力したいものである。佛教舞踊についても以前から吉續豐明氏や寺田義夫氏の研究努力あり、最近には鈴木郁郎氏などあり、現にそれぞれ活躍しておられるが、この時局のことゆえ全國的な連絡協力が足りない。講和も成立せんとしおちついて來たのであるから、宗派を超えての連絡協力を願ひ、此方面の教界活動を望んでやまない。

○

寺院へお参りする人が少くなつて、在家で宗教の集りが、今迄よりも増加して來たように思われる。私も在家の集いに出ることが多くなつてゐる。これにはいろいろな原因もあるうが、今日の時代またやむをえぬすがたであろうと思われる。佛教の傳道上在家居士の力大なることは改めていうまでもない。今日在家佛教の形で新しい運動が力強く進められている。長崎の在家佛教運動というか、長崎共生會の市丸茂氏らの動きは注目に價する

ものがある。其他各所に信仰の熱心な集りが在家で行われ益々増加の傾向にある。眞實の生きた新しい信仰運動がこの中から生れて來るのではなからうか。

○

これらのことはみなよく知られていることばかりで何らことあたらしいことはない。たゞ私の小さな範圍で實際にふれてそれも佛教に好意をもつ人達の言葉を聞いて感じていることの二三を述べた管見にすぎない。教界への要望という題を興えられながら一方面的の現地報告的なものになつてしまつたことをお許し願いたい。しかしそれだけに實際に教界に要望されていることである。

佛教はもつと社會的に活動してもらいたい今日の平和運動や、勞働運動、思想運動、社會事業救難運動や病院傳道、佛教徒會議等の各方面に積極的に乗出し、世界佛教徒の連絡提携、更に歐米への佛教進出に努力せねばならぬとの聲も聞える。それらの事に關しては項を改めねばならぬことであり、他に適當な人があつて述べられることであらう。

德本行者 (一)

服部英淳

名號塔

千津川行者

迷ふから地獄も餓鬼も出来るなり

盡十方は彌陀のふところ 德本

村はずれのさゝやかな小川にかゝつてゐる石橋の下で、私は少年時代の夏の日ざかりをすごした。石橋のたもとには「南無阿彌陀佛」
「德本」と刻んだ石の名號塔があつた。その奇妙な文字を、指先で無心にたどつたりした。そここゝの家で、葬式や法要の時、同じ文字の掛軸が床の間にかゝげられるのを、不思議な連想を以てながめた。

東京へ出てから、行者の傳を讀んで、その行蹟に心を引きつけられた。そして近畿、北陸、關東の各地にも、多くの名號塔が建てられてゐるのを知つた。その後、數年の間、小石川一行院の近くに住んだ。そのころ「彌陀のふところ」の廣大さをはかりかねて、暗中摸索してゐた私は、しばしば一行院を訪れ、行者の墓の前にたゞずんで冥想した。少年の日の思い出のこまが、私を行者の前へ引きよせたのであろうか。

こゝは紀州日高川に近い千津川村の山邊。南國とはいへ、寒風肌をさす丑の刻に、今日も德本行者は裸のまま、庵の前の谷川に水垢離をとり、石の上に立つて廣懺悔文を誦した。「敬つてもうす十方の諸佛……」十方諸佛のみ前に永劫の罪障を懺悔した。そして裸身の上に麻の七條袈裟をまとい、庵に歸つて終日終夜、禮拜念佛した。その數は一日に五千七千、或は一萬にも及んだ。

あまりに激しい修行であつた。二年ほどは髪も剃つたが、後にはそれさえ暇がなく、長く肩にたれたまゝだつた。聲はかれ、物いへば口いたみ、齒がうごき、全身はひびくとあかぎれで松の皮のようにさゝくれ、禮拜の後毎に赤い血がほとばしつた。

ある時、無言で別行してゐると、赤や黄の古綿のような汚物を吐いた。その後は身體が輕々としたという。しかし兩の股は、はれただれ、悪汁流れて痛みはげしく、皮も肉も破れて藥研の口のようになつた。五體投地が出来ないまゝに、小高い所に腰かけて禮拜し、或は立ちながら念佛した。その當時の心境を次の歌に托してゐる。

世をのがれうき世の中は腰かけの

いづこも旅のおもひなりけり

苦痛は百五十日もつゝいた。

「このような苦を受けるのも、みな宿世の業報よ。自ら作り自ら受けるのに誰を恨もうぞ。宿因つたなく今人まで修行を怠つた報いぢや。もし今世につとめねば。未來の苦はこれに百倍しよう」と自らはげました。これを代受苦というのであろう。本願念佛は罪業の反省に導かれる。里人たちは、行者の激しい修行を見て合掌し永遠の罪の深さを知つて念佛にいそしんだ。

かつて彈誓澄禪などが、山に伏し木食草衣したあとをしたい、五穀を絶ち鹽氣を禁じ、「そらまめ」の粉一合を一日の食と定めたのもこの頃だつた。

本願のそのいにしへをわすれずば

我なすわざにさはりあらすな

母の教

徳本は寶曆八年（一七五八）六月二十二日、紀州日高郡志賀の庄久志村に生れ、幼名を三之丞といつた。まだ誕生をすぎて間もない頃、姉のふところで、さしのぼる中秋の明月を見て「なむあみだぶつ」と唱えた。笠を頭につけて後光とし、印を結び、樹下石上に坐り、佛様の眞似をして遊ぶ子だつた。

四の歳時のこと。仲よしの隣の子が急死した。信心深かつた母は泣き悲しむ三之丞を膝に、貴賤貧富の別なく、老少を定めず、逝いて歸らぬ世のことわりを、ねんごろにさとした。そしてただ彌陀にすがつて念佛するより外には、道のないことを教えた。

幼くして早くも世の無常に驚いた三之丞には、終世忘れることの出来ない母の教であつた。それから、だれが勧めるともなしに、いつも念佛を口にしていた。三寶に祈り、蓮華を吞むと夢みて生れたという此の子は、まことに生れながらの佛弟子であつた。

一枚起請文

九歳の春には、出家したいと父母に願つたけれども、許されなかつた。十歳の頃からは、數珠を裡に入れて日課念佛を始めた。そして十六歳の夏、三寶に誓つて勤行式を作り、朝夕は線香四本限り、晝は田畑を耕しながら念佛した。

晝のいとなみ、夜のつとめ、激しい疲労に、どうかすると、知らず知らず睡りに落ちることもあつた。そこで終世横臥を廢した。鎮守のお祭りで、老も若きも、酒を汲み碁に興じ、さんざめく村を餘處に、三之丞はただ一人、裏山のほくらにこもつて、夜もすがら念佛禮拜していた。

三之丞の家の東五里、大瀧川の月正寺は靜かな山寺であつた。住持の大良和尚は熱心な念佛者だつたので、月に五日か七日、和尚と共に水垢離をとりながら、別時念佛を修行したりした。

水垢離をとることは毎朝の習わしとなつた。ある大雪の朝。どんなにか寒かろうと、母がいろりに火をたく門口へ、髪も鬘も眞白な老人がのぞいた。母は回國の行者と思つて

「今日は大變寒いから、どうぞしばらく火にあたつていつて下さいますせ」

とすゝめた。すると老人は、つと入つて來て、三之丞を見つめ、「そなたは、たゞ人でない。後日、世のため人のために、立派な

知識におなりじやろう。これをあげるから讀んでごろうじ」といつて、何か書いた一枚の紙を渡した。受取つて讀んでいるうちに老人は降りつもつた雪の路に、いずともなく姿を消した。これは宗祖大師の御遺訓一枚起請文であつた。三之丞は、いつも襟にかけて極樂往生の「あかし」とした。生涯の法話に、一枚起請文より外には説かなかつたのも、これによるのである。

出家

安永五年十九歳の春の初めごろから、父三太夫の病氣が思わしくなかつた。三之丞は、山を越えて往復十五里の道を藥を求めに和歌山へ通つた。朝、家を出て夕には必ず歸つた。病のはげしい時は、月に十數度も往復したが、他人に頼むようなことはしなかつた。その看護の甲斐もなく、三月に父は六十七歳で亡くなつた。父亡き後は農事も忙しかつたが、鋤を念珠にかえ、念佛を「きこり歌」とし、或時は草の根、木の實を食べる念佛三昧に日をすごした。

天明二年には、郡の財部村往生寺の往持大圓大徳について五戒を受けた。この頃には、しばしば佛の眞身を拜し、淨土の莊嚴を感じするようになった。そして四年の春、ようやく母の許しを得て大圓大徳について剃髪し、その名も徳本と改めた。二十七歳の時であつた。

それからの修行は、いよいよ激しくなつた。天明五年の春には、月正寺の前の丘で、三十日の間、毎日わずか一合の「いり麥」を食糧として念佛行道した。秋には大河浦の元祖大師の遺蹟に參籠し、今日からは塵の世を離れて跡を林丘に隠し、苦行の功が成就したならば、利益を四海に及ぼそうと祈請した。

所詮、往生寺の生活も世事に煩わされることが多かつた。そこで翌年には落合谷に庵をつくり、さらに千津川村の山邊に二疊敷ほどの小さな草庵をかまえて住んだ。

行脚

千津川の苦行も六年つゝいた。萩原村や鹽津村の信者たちは、庵をしつらえて迎えた。寛政六年三十七歳の時には、有田郡須ヶ谷の山腹に籠つた。須ヶ谷は徳本の祖先管領畠山氏の城趾であつた。

翌年始めて都に上り、知恩院などの祖蹟を巡拜した。恐らくは、十年前に大河浦で誓つた苦行の成就を、大師の前に奉告し、さらに念佛弘通の冥護を祈つたのであろう。そして古知谷に彈誓の昔をしのんだ、熊野に詣で、須ヶ谷へ歸り、山頂の巖に四尺の「さしかけ」を作つて一千日の禮拜念佛を修行した。

その後は、或は高野に登り、河内に聖徳太子廟を拜したりしたが、ついに享和元年四十四歳の時、夜ひそかに須ヶ谷を抜け出し、行脚の旅に上つた。先ず鹽津の勝尾寺に宗祖流謫の跡をしのんで、山上に念佛すること三年に及んだ。又京都東山如意輪寺に三ヶ月修行の折、鹿ヶ谷法然院で始めて長髪を剃り、單衣を身にまとつた。

この年享和三年の冬、淨土宗門の規式によつて傳法を受け、かつは關東に化益しようと江戸へ下つた。舊約によつて傳通院の鸞洲を訪ね、その寮に錫を留めて貫主智嚴和尚から淨土の血脈を授けられた。

明けて文化元年、先ず日光に詣で、越前をめぐり、浪花、明石、近江などに教化の旅をつゞけること數年、同八年の宗祖六百年の御忌に當つては、再び鹽津の勝尾寺に掛錫した。(續く)

日記抄



眞野正順

人の運命の不幸も、また病氣のやうなものらしい。何者もこれを

避けることはできない。何時、いかなる場合に、その中に轉落する

かわからない。しかも、それは必ずしも常に、我がなした行爲の正

當な報償といふ譯ではないのだ。それだけの不幸を身に引受けるの

覚えがなくても、人はしばしば不運の中に陥ちる。それは病氣と同

様である。しかもほんのかりそめの原因でひきおこされた病氣が、

必ずしもきつと治癒するといふ譯でないと同様に、我々の運命の不

幸の後には、必ずそれからの回復があり、また仕合せになつてくる

とは決つていないのだ。

ところが、人は病氣の場合には、自分の蒔いた病の原因が、必ず

良い事であつたに相違ない。

○

人は老境に入つてくると、交友關係に妙な惡癖ができてくるやう

だ。自分を輕んじるやうな、また自分の進路の邪魔になるやうな者

を異常に強く憎むようになる。それが相手に非常な邪惡な心があつ

て、強いて底意地悪い事をするかのやうに、強くむしろ不自然にま

でそれを憎む。———さういふ傾向が年齢と共にだん／＼強くなつて

くるやうだ。そしてそれと共に、こん度は、自分にいやに忠義立つ

た親切な行爲があると、之はまた、先とは反對に、非常に喜び感激

し、まるでその人の心が澄み透る白玉でも出來ているかのやうに

しもこんな病苦に相當してなかつた事を恨み
歎きながらも、ついには一つの諦めに入る
のであるが、運命の不幸に於ては最後まで之
を諦めざる事をしない。これはどうした事で
あらうか。

良き醫が患者のために病の原因を算へ、そ
の靜かな諦めに導くと同じやうに、昔の良き
教師が、人の不運のために、その因果應報を
説いたのも、考へて見れば、それで其の人に
靜かな心の落つきを與へることができるなら

感銘する。

これはどういふ事であらうか。おそらく老齢になると共にだんだん自分が世の中の片隅に片づけられてゆき、世の主流から次第に押し離されてゆく、その必然性に對する無意識的な恐怖、もしくは反撥からくるのであらうか。そのため人に對する理解や批判も甚だ衝動的となり皮相的な相對的なものになつてくるのであらうか。

この事はおそらく或る程度までは何人も、免れる事のできない運命であらう。たゞこういう傾向を自分の上に見出した時には、既にひとつの顯著な老衰の徴しが自分に表はれて來たとして警戒せねばならぬと思ふ。

○

先日醫者が來た時、ふと思ひ出して、十數年前、發病當時のレントゲン寫眞を出さして見せた。しばらく見ていたが、やがて私の顔を見てつぶやくやうに『これだけ見たのでは醫者としては五年の生命は保障できなかつた』といふ。あれからもう十何年、自分でも、それがどうして、治つてゐるのかまつたく分らない。不思議に思つてゐるのだが、尋ねて見ると、現在では要するに病所が全體にわたつて凝固し、その上、臓器そのものがひどく收縮してゐるらしい、『とにかく醫者としては、奇蹟と申す外はない』と云ふのだ。そう聞いてみると、さすがにひやりと胸が震ふた。

今朝、T君が訪ねてきた時、ふとこの話をしたら、その若い眉をあげて『貴重なお生命だから、此からはたゞ先生の先生たる本領だけを。』と、力を込めてすゝめてくれた。その言葉が妙にいつまでも心に滲みた。

○

その昔、關東大震災の時には、私の家は全焼し、それにつれて事情あつて多少あつた物も全部、同時に喪はれ、一時は全くの赤裸となつたが、其時すでに三十才に達していた自分を省みて、むしろこの事を感謝したのだつた。これが晩くもなく、早くもなく三十才の盛年にまで生ひ立つた上で、一切の所有の喪失に遭遇する事ができたのはむしろ恵まれた運命とせねばならぬ。人間この歳にまで育つて赤裸かとなつたと何の嘆く所はない。この事がもし、もつと稚い、若しくはもつと年老いてから來たのならば、或は嘆くのも止むをえないかも知れぬ。此の充實した盛年に於て、何の嘆く所があらうと、——私はそう思つた。

過ぐる年、私は病によつて、突然我が生命の灯が眼前に危く明滅するのを感じた。かつて、あの震災の時にはその頼りでもあり誇でもあつた充實した體力はすでに全く蝕ばまれ、それと共に生命の灯さへ掻き消されんとしつゝある。私は惑うた。しかし少し落ついて

考へて見ると、まだこゝに惑うべく嘆くべくぞくばくの生命がまだ残つてゐるのだ。

今はこの生命の上に於て、この斷滅する蠟火の瞬きを靜かに見つめ、かう考へるべきではないか。私の五十年の歲月は、空しかつたと云へ、決して短いものではない。其に對する若干の用意と材料とを與へてゐる筈である。まだこゝにいくらかの生命が残つてゐる。私は靜かに、わが轉變し來れる運命の數奇を見詰めやがて來るべきものに對處していくべきではないか。私には生と共に死の用意があつて然るべきである。

死の用意とは、これから残された、瞬きのごとき生に於て、私は猶ほ何を爲し得べきか。をよく考へる事である。うろたへてはいけない。

○

この頃の新興宗教など見ると、まともな理性では考へられもせぬ荒唐無稽なことを、多くの人達が信仰して入つてゆく。それは、我が身にふりかゝつた病氣や不運の惱みに驅られて—云はゞ個人的欲望に壓倒されて、その信ぜられもせぬ事を強いて信じてゆくのだがたゞこゝに注意すべき點は、かうして入つて行つた彼等が、何時までも最初の心持でゐるのでなくて、教に入つてゐる内にいつか、その心の持ち方が變つてくるといふ事である。つまり、最初は強い利

己的欲望で、自分の理性を押し伏せて、信ぜられもせぬ教の中に入つてゆくのだが、入つて説教などを聴て見ると、いかに荒唐な迷信と云へ、今の世の宗教と銘うつて出ているかぎり、眞の幸福は自己を離れて公に盡すことにあるのだ、なぞ人倫の道を説き、そうしなければ眞には教の御利益にはあづかれないなぞと説くものである。それで、最初は強い利己的欲望を以て入つて來た連中も、くりかへし説教など聴いてゐる内に、次第に心が博くなり、自己の利慾に固まり切つた心が、ほぐれはじめ、最初とは似つかぬ。博い明るい心がその人に現はれてくる事がある。これは注意すべき點だ。つまり利慾に凝り困つた人が、その利慾を獲たい一心で、かへつて、その凝つた利慾心を解きほぐしはじめるのである。これが新興宗教のもつ二面であつて、こゝにまた、教の魅力も横はつてゐるのである。

これだけ云ふと新興宗教もやがて人を善き心に導く仲々善い教だと云ふ事になるが、附加へて云つてをかねばならぬ事は、この二面は互に釣合つて常に相並んでこそ、その信仰となるので初めの迷信を斷ち切つて後の善い方だけになり切る事は出來ない。少しぐらい善い心が起つても、いつも初めの利慾を中心とする荒唐な迷信に歸つてこねばならぬ。それがこの教の肝心な「根」だから、これから離れては、この教の信仰はその生氣を失つて全く力のないものになつてしまふからである。それ故、いくらたつても迷信からぬけ出

られない。

高度な宗教でも、やはり、こうした二つの面は見られるものである。法然上人の法語などでも、一方『念佛者は、世を一くねり恨みてあるべき面もちにて』ただ此の度こそ往生を仕遂げんと『一丈の堀を越ゆるに一丈五尺の心を持つべき……』と云ふあたりに接すると、如何にも、厭世的な憂鬱な顔つきをして、ひたすら、我身の往生のために念佛ばかり数えている陰性な人のやうにも感ぜられるが

小雪チラク

中野 尅子

▽名が出ぬような人間でもいかぬ。名が出てみいかぬ

▽十人から好かれる人より、十人から嫌われる者の方が偉い

かも知れぬ。

▽線の切れた電球のような人間は、いくつゴロ／＼して居ても仕方がない。

▽怒りを殺すと怒りに殺される。なさけを生かすと、なさけに活かされる。

他方「天に仰ぎ地に伏して喜ぶべし、この度彌陀の本願に逢ふことを、行往座臥にも報ずべし、かの佛の恩徳を。」と歡喜勇躍し、僧俗の規範をも越えて天衣無縫の生活をひらかれているのを見ると、さきとは全く異つた廣濶な樂天的な明るい風光に接する思ひがするのである。この両面のいづれに、上人の本領があるかと尋ねるのは、むしろ謬である。前者から後者が導き出されるものであるが、後者は前者なくして、それ自身を維持しない。兩者は相對して互に相支ふべきもの、すなわち、眞摯なる厭求心なくして、眞實の現生法悦はあり得ないのである。

○

私は、あくまでも拙ない機根ではあるが、しかしこの日々は常に喜びに満ちて餘念なく一切の存在に感謝し、到るところに御光の遍在を信じて恰もすでに淨土に在るが如く生きていきたいものだと思つてゐる。

そしてどうしたら淨土に生れられるかと心配する間に、この世の社會に對してどういふ風に佛の溫き御心を現はすかといふ事に心を注ぎたいと思つてゐる。それが又經典の中にも勧められているやうである。そして淨土に生れるのを願ふが如く又、此世に淨土の様を少しでも映し實現していきたい。それは、おそらく空に浮ぶ暫しの蜃氣樓のやうに忽ち消え去つてゆく影のやうにはかない努力かも知

知れぬ。しかしそうであつても其れがやがて大なる佛の御心を偲ぶ
よすがとなり、多くの人々をして、御心を知る機縁となりうるなら
ば充分である。今の世に佛を佛として知り得る事は眞に難かしく、
又、その人の數は眞に少いのだ。

又、そつといふ尊い機會が惠まれぬものならば、日常の我努力を専
ら佛の道を明かにするに傾けよう。佛の御教を御教の如く明かにす
ることは、人間の歴史に於ける止むことのない我々教徒の勤めであ
る。御教は常に、その時代々々の特殊な狀況に於て明かにして行く
べきものである。時代は常に前代のものを崩し去り、又全く新たな
る課題を帯びて立現はれる。かゝる中に佛教を打建て／＼してゆく
事は歴史の流れの中にある我々人の止む事のない勤めである。それ
は築いて完成せず、完成せずしてまた、崩されていく運命を持つも
のであるけれども、時代々々の人は絶えず揮身の力を振つてこの任
務を勤めとおさなければ大いなる佛教は決して明かとならない。も
し前代の人々が、この道において怠慢であるならば、いかに尊き教
といへども、その灯は燃え細り、やがて瞬き消えてたゞその形骸の
み後代へと残されるのである。この消えなんとするものゝ惱みは、
誰よりもよく今の我々において最も、よく體驗せられているのでは
ないか。

埋火の絶へたるをつぐ炭はあれど

おこしがたきはすたれたる道

一行誠上人

私共の行く道は一つ、ただ渾身の菲力を奮つて、この時代の課題
に於て佛法を明かにすることである。

かゝる間に——おそらく私共の力は竭き、又生命も瞬くがごとく
消え去つていくであらう。しかし——たとひ微少とは云へ、私共が眞
にそのあるほどの菲力において勉めて勉めとおすならば我が後生に
於ける佛光は、僅かながらより明るく瞬き初めるであらう。何程か
は容易く、後人は佛法に觸れうるのであらう。

——やがて、來るべき満月の夜は遠い。それを迎へ來る遙かなる
前驅たる、あの天上に數知れず散る小さき慧星のその微少なる一片
とならんこと、それが、我々のつとめであらう。

祈 念

みほとけの みめぐみにより
今日の一日を 人としての過なく
互に睦び 互に譲り
己が業を勵みて 世の文化につとめ
社會に光明を捧げむ
みほとけの 加祐を給へ

——十念——

鎮西中學校長・上田貞雄作詞。同校おつとめ式
の際、念佛の前に捧げ讀まれております。

芝園だより

◎新年おめでとうございます。昨年は種々の困難も、會員諸氏の御協力によつて切抜けえました。今年も、新たな企畫と努力によつて大いに活氣あらしめたい。

◎原爆か平和かと、息づまるような世界の前に、本誌も保守傳統の光のみを後向きに拜むことをせず、勇敢に、眞剣に、前向きに進もう。教典に、法語に、具體的な私の、今の「指針がないといつて、ぼやいている人々があるが、其人達は、後向きの人である。うか／＼するとどぶに落ちる。

◎會員との結びつきを一層親密にするため本年より「淨土の集ひ」を復活する事となり、その第一回を都内、會場を宗務所と決定。今後、各地での催ほしを期待される。◎暫く休まれた眞野先生も、元氣を回復された。原稿申込殺到の中、本誌に日記抄。しみじみ讀ませられる。

◎佐藤密雄氏の自坊、鎌倉大佛は今年七百年祭になる由。昨年末「美男に在す」あの獨特の美を近代尺度から研究する企てがあり、ニュース映畫其他も取材に出動するという大規模であつた。(竹中)◎椎尾僧正は年來ますます御壯健にて東西に御活躍あられる。本號は特に忙しい中、玉文を頂いた増上寺も假本堂とは名けられていたが、立派なのが、元、水盤前見當に地を定め上棟式も終り、着々竣工中で喜しいことである。

◎金森徳次郎氏は人も知る國會圖書館長であり、又、國務相の時は憲法の産婆役として國會に奮闘せられた。本誌の文は、よく現代自由主義の虚を衝いて誤たざるもの。

◎竹中氏、最近、目方も増して、元氣がよい、養生の効見るべきものがある。尙、御自重を祈る。

◎吉田絃二郎先生の法然をテーマとされた戯曲「京の時雨」が先月ラジオにて大阪放送劇團の人々に

よつて演ぜられていた。前篇である。盜賊耳四郎が、惡を惡と思われ所業の後に、法然の教に飄然入門し修行に勵む、しかし、彼の殘してきた愛妾を執念ぶかく追ふ津の三郎がある。其が氣にかゝり魔にさそわれたか耳四郎は再び愛妾の所に退轉するといふ所で終つてゐる。法然の超克せられたであらう内面的人間性の苦惱を側面的人物の動きで語つていかうといふ點が心に留つた。後篇を楽しみとする。

◎佐藤賢順先生、舌に腫物ができ、舌癌で一月の命だと宣せられ、遺言まで書き、四度他の醫に診てもらつた所、單なる腫物と判明、大いに胸をなでられしと。(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

龜井眞學(大阪)

笠原英心(佐賀)

長岡健一(山口)

誌上厚く御禮申し上げます。

誌代

會費半々年二百圓、一年四百圓(〒共)毎號定價三十圓〒四圓、但し、本號、前號のみ増頁に付定價四十圓。此れまでのお納め願つた前金も、この割で引かせて頂き前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年三月廿五日印刷
昭和廿七年一月一日發行

(本號特價四十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人遺仰會

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金二百圓(送料共)

天皇歌集 みやまきりしよ

A 5 二二〇頁
定價 一千圓

天皇のお歌 七十九首に配するに、齋藤茂吉、釋道空、吉井勇、安倍能成、谷崎潤一郎、高濱虛子六氏の謹解と印象記を、横山大觀、川合玉堂、石井柏亭の原色版を、前田青邨の装幀をもつてした家寶とするにふさわしい豪華版。

石橋湛山著

湛山回想

B 6 三八八頁
定價 三〇〇圓

日蓮宗總本山身延山久遠寺八十一世法主杉田日布師を父にもつた石橋氏が生涯を語つた興味つきざる人生録。

古島一雄著

古島一雄清談

B 6 三二〇頁
定價 二二〇圓

政界をあやつる陰の人 古島老が八十餘年の一生から體得した滋味掬すべき人生哲學であり處世の妙諦である。

毎日新聞社編

岡田啓介回顧録

B 6 三〇四頁
定價 三〇〇圓

二・二六事件で、奇蹟のいのち拾ひをした岡田翁が、真相の永久に埋没されるを惜しんで語つた貴重な文獻。

東京都千代田區有樂町一ノ二

毎日新聞社

振替東京二八〇〇番

辻善之助博士序 最新刊
中澤見明著

眞宗源流史論

A 5 三七〇頁
價 五八〇圓

(要目) 專修念佛宗の教團組織及經濟問題、法然諸傳成立考、西方指南抄と漢和語彙、淨土宗支持の諸門弟、選擇相傳の御影について、教行信證の研究、親鸞門下のひとびと等

佛教協會編

新譯佛教聖典

A 6 一一二頁
價 三十五圓

現代人坐右の書、平明な佛教のバイブルとも云ふべき書、一般知識人、信徒への施本として好適。

法藏館

東 丸 島 區 中 央 都 京
番 3 4 7 2 都 京 振 報

淨土トラクト

B 五半截・十六頁
價 七圓 送八圓

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い信仰とで指示せる佛信仰者必讀の書

淨土シリーズ

文庫版 四頁(價)二圓
百部以上・八圓三百部以上・五圓(送料)五十部毎八圓

藤田寛雅著

お十夜

前田龍海著

參詣手帖

(お塔婆・お墓・位牌・お珠數・法事)

會 仰 鑽 人 上 然 法